

157	3	也
7	などの	○
	○	○
	など	×

解釈と鑑賞

狭衣物語解釈 (9)

又の日は、所々に御文書き給ふ。色々の紙の、色はだへなどえならぬ、あまた取り散らして、墨こまやかに押し磨りつつ書き給ふ。御手は、「げになどでか少し物の心知らむ人のいたづらに返さむ」と、見ゆるに、御歌どもぞ、なべての人の口付にてだにをかしとも見えぬは、悪しう人のまねびためるにや。

〔口訳〕

次の日五月五日の端午の節句には、中将の君はあちらこちらにお手紙をお書きになる。色さまざまの紙の、その色や紙のきめなどの何とも言えず立派なのを、たくさん取り散らして、墨をこゆく押しすり押しすりして手紙をお書きになる。その御筆蹟は、「ほんとに

10	さむらし	さゆらし	さゆらし
10	也	なるへし	○

(本学助教授)

本田義彦

どうして少しでも物の情趣を解する人ならいかげんな返事を書こうか、いや、きつとま心こめて書くに違いない」と思われるほどお見事であるが、御歌などは、普通の人のつくったものとしてさえおもしろいとも見えないのは、聞き伝えた人が悪く誤って言い伝えたのもあろうか。

〔注記〕

。又の日―前に「卯月も過ぎて五月四日にもなりにけり」とあったので、ここは五月五日、端午の節句の日である。その端午の節句のお祝いのための御手紙である。

。所々―次の「左大将の御女」「一条院の姫宮」などのことである。

。色々の紙―当時手紙には色々の色の紙を用いていた。
。色はだへ―「色はだへ」という語は、竹取物語以下源氏物語な

ど、当時の文献には見当らない。「はだへ」は、曾丹集二例、今昔物語一例、徒然草一例などあって、当時すでに使用されていたと考えられるが、すべて人の肌の意に用いられている。ただし、源氏物語・梅枝の巻には、「高麗の紙のはだ細かになごうなつかしきが色などはなやかならで、……」という用例がある。これは「はだ」ではあるが、「紙のはだ」で、すなわち「紙のきめ」のことである。「はだ」と「はだへ」とは同じ意と考えられるので「色はだへ」も「紙の色と紙のきめ」の意と思われる。全訳王朝文学叢書(吉沢義則著)には「色さまんく」の紙質なども」とあり、日本古典全書(朝日新聞社刊)の頭註にも「色や紙質など」と解してある。九条家本には「いろいろあ」とあるので、これだと色の具合の意となる。内閣文庫本(岩波書店・日本古典文学大系)には「色はだへ」の語がないので問題はない。

。こまやか―この語の解には、①こまごましいさま。②濃いさま。③上品で洗練されていること。④情が厚い。⑤親密だ。⑥ニッコリ笑うさまにいう語(明解古語辞典)などがあるが、ここでは②の意にとった。

。御歌ども云々―「狭衣下紐」には「草子の作者の卑下也」とあり、「日本文学大系」の頭註にも「草子の作者の謙遜で、凡作の意」とある。物語の中では中将の君の歌でも、実際には作者が作った歌なので、謙遜して言ったのであろう。

。まねぶ―解としては、①まねしている。②まねする③そのままを人に語る(明解古語辞典)などがあるが、ここでは③の意で、

「言い伝え」「聞き伝え」の意。

。ためる―「たるめる」が音韻変化で「たんめる」となり、その「ン」の音の表記の方法が当時なかったので無表記としたもの。「便びんなし」を「びなし」と表記するのと同じ。

左大将の御女、宣むすめ耀せんえう殿と聞えて、春宮にいみじう時めき給ふを、いかなる風の便りにか、ほのかに見聞えさせ給ひけり。されど、いかでか思ふさまにしもあらむ。御消息せうしきなどだにおぼろげならでは通ふこと難くぞありける。あまり待遠なるも恋しく思ひ出でられ給ひて、恋ひわたる袂はいつも乾かぬに今日は、あやめのねさへなかれて

〔口 訳〕

左大将の御娘で、宣耀殿の女御と申し上げて、春宮にたいそうご寵愛をうけていらっしゃる方があるが、どのようなわさがきっかけでか、こっそりおあいあそばされた。しかし、どうして思うようにおあいになることができよう。御手紙などでさえ、普通一般の挨拶程度でしかやりとりすることはむづかしかった。おあい申すのが待遠であるにつけても恋しく思い出されなざって、次のような歌をお贈りになる。

ずっと恋い続けているので、私の袂は涙でいつもかわかないのですが、まして今日は五月五日の端午の節句で、家々の軒にさすあやめの根が涙で流れるほどにも、思いにたえかねて声に出して泣かれてしまいます。

〔注 記〕

。宣耀殿—せんえうでん。平安京内裏の殿舎の一。内裏の北方、貞観殿の東にある御殿。女御の居所で、その御殿に住まわれる女御を御殿の名称によって、宣耀殿または宣耀殿の女御などと呼ぶのである。女御は皇后に次ぎ天皇の寢所に侍る女性であるが、上皇・皇太子の妃をもう。ここは春宮の女御である。狭衣は飛鳥井の女君を得る前に、この女性とかなり親しくしていたようである。

。春宮—狭衣の父の堀川大殿の兄にあたる一条院の御子。後の後一条院。

。時めく—「時を得て栄える」意である。したがって、政治界において「時めく」といえば大臣などになってはぶりのよい人々のことをいい、芸能界では一流の人気者ということになる。ここでは、お后方の中で「時を得て栄る」というのであるから、寵愛をうけてはぶりがよい意になるのである。

。風のたよりに—「風のたよりに」は、うわさ・評判の意。次の宇津保物語・藤原君巻の歌をふまえている。

ほのかには風のとよりに見しかども
いづれの枝と知らずぞありける。

。恋ひわたる涙はいつも乾かぬに今日はあやめのねさへなかれてね—懸詞。あやめの根と、泣く音にかける。なかれて—懸詞。あやめの根が流れる意と、泣かれる意にかける。

(下の句)—内閣文庫本(岩波・日本古典文学大系)では「今日の菖蒲のねをぞそへける」となっている。

一条院の姫宮の御けはいひも、ほのかなりしかばに

や、なべてならぬ心地せしを、「いかで御かたちなどよ
う見奉らむ」など心にかかり給ひて、少将の命婦のもと
に例のこまかにて、中に、
思ひつつ岩垣沼のあやめ草水籠りながら
朽ち果てねとや
などやうにて数多あめれど、同じ筋なればとどめつ。

〔口訳〕

一条院の姫宮の様子も、ちらりとごらんになったばかりであつたからか、普通でなく美しくいらっしやるように思われたが、「何とかしてご容貌などよく見申しあげたい」など、心にかかりなされて、少将の命婦のもとにいつものようにねんごろな手紙を書かれて、その中に、

人里はなれた岩垣沼のあやめ草が、水にこもったままその根をひかれることもなく朽ちてしまふように、恋しい気持を心の中に思っているだけで口にも出さないですましてしまえとおっしゃるのですか。

などといった具合で、よそへもたくさくさん贈られたようですが、同じようなあやめの節句にちなんだ歌ばかりあるから、書くのはやめにしました。

〔注〕

。一条院の姫宮—春宮の御妹。後に一品宮と呼ばれる方で、飛鳥井腹の狭衣の娘を養女とし、また後年齋院になられた方。

。少将の命婦—一条院の姫宮付きの中臈の女房で、狭衣とは親密で

あったようだ。命婦とは、四位・五位の中臈の女房のことで、
内命婦・外命婦・上の命婦は三種あり、内命婦は一般の命婦
のことで、上の命婦は天皇に近侍する者をいい、外命婦とは四
位・五位の人の妻である女官をいう。

。思ひつつ岩垣沼のあやめ草水籠りながら朽ち果てねとや
岩垣沼―垣のように岩で周囲をかこまれた沼の意で、「岩垣」に

「言はず」をかけ、また人目につかない意に用いる。

この歌は、風葉集・恋五に「五月五日女のもとにつかはさせ
給ひける、狭衣の帝の御歌」としてのせられ、また百首歌合の
廿番には「二位の中將と聞えし時一品宮に」という詞書で、第
一句思へども、第二句はかなき沼の、第五句朽ちや果てなむ、
となつてのせられている。この歌は、拾遺集・恋一・柿本人麻
呂の次の歌によつたと思われるが、万葉集では第一句が「青山
の」となっている。

奥山の岩垣沼の水ごもりに恋ひやわたらむ逢ふよしをなみ
なお、六条齋院物語合六番の、宮の小辨作「岩垣沼」という物
語は、これらの作によつて作られたものであろう。

かやうに折につけたる言の葉などは散らし給へど、心
の中は「いつまでか」とのみ、この世はかりそめにすぎ
まじくおぼさるべき、丁字に黒むまでそそぎたる御単衣ひとへ
に紅の御袴著給ひて、つらづ多つきて池のあやめの心地
良げに茂りたるをながめ出で給ひて、「音羽の山には」
など口ずさみ給へる御声は、なほ類たぐひなし。

〔口訳〕

このように季節につけての手紙などはあちこちにお贈りになるけ
れど、心の中では「いつまで生きられるものか」とばかり、この世
はかりそめで、何をするにも気のりのないといった気持なのだろ
うか、丁字の染料を黒くなるまで注ぎかけてそめた御単衣に紅の御
袴をつけられて、ほほづえをついて池のあやめの気持よいまでに茂
っているのをながめやりなざつて、「音羽の山には」など口ずさび
なざる御声は、やはりくらべもなく優れたものである。

〔注記〕

。いつまでか―日本古典全書（朝日新聞社刊）の頭註には「何時ま
で婦人達との交際も続けよう。これももう暫くの事と、始終考
へ」とある。結果的には婦人達との交渉のことにもなろうが、
ここでは「いつまで生きられるものか」と命の意にとつた。内
閣文庫本（岩波・日本古典文学大系）では本文に異同があり、
この語はない。

。おぼさるべき―上に係助詞がなくて連体形となっている。ここも
諸本に異同があり、蓮空本・九条家本では

御心の中には一すぢにものみ心ほそくおぼさるゝ
となつているが、やはり「おぼさるゝ」と連体形である。内閣
文庫本では

御心の中には一すぢにものみ心ほそくて
となつているので問題はない。この連体形の用法については、
紫式部日記新釈（曾沢太吉・森金敏）に説があるので、紹介し
よう。

紫式部日記の所謂消息文中の「式部のおもとは」の条に、

まみ、額つきなど、まことに清げなる、うち笑みたる、
愛敬も多かり。

この「うち笑みたる」は上に係助詞がなくて連体形止の形をなしている。評註紫式部日記全釈(阿部秋生)・紫式部日記全釈(小室守三)などでは「清げなり」の本文をとっている。問題はないが、前記紫式部日記新釈では「清げなる」の本文を採用して次のように述べておられる。

この連体形は、類従本などには「清げなり」と終止形になっており、あるいはそれが本来の形であったかもしれないが、この連体形のままでも、かならずしも誤りではない。連体形は、或る場合には、ほとんど連用形と同じようなままでになることがあるからである。……(用例略)……ただ、連用形と異なるのは、連用形よりもはるかに強くそこに詠歎の思ひ入れがある点である。

この説も面白いとは思いますが、なお不安も残る。ところで昭和四十四年に刊行された鎌倉市図書館蔵の本文は次のごとくである。

心のうちはいつまでかとのみこの世はかりそめにものすさ
ましくそおほさるへき

この所は、この稿の本文(流布本)と同系統と思われるが「そおほさるべき」と係助詞「そ」がある。この写本の書写年代は、解説者山岸徳平博士によると、室町来近世初の書写、恐らく慶長・寛永初間頃の筆写で、寛永以後には下らない、とのことである。私には、この本文に従うのが妥当のように思われる。

。丁字―チャウジ。丁字染の略。丁字を煮出して、そのしるで染めたもの。黄色味をおびた淡紅色。「かうぞめ(香染)」ともいう。ただし、香染めより濃いという説もある。

丁字はフトモモ科の常緑喬木。モルッカ諸島・フィリッピンなどの熱帯地方に産し、花は芳香を有し淡紅色。蕾から薬剤をと

り、また花枝・果実から油をとって香料などにする。
。丁字に黒むまで注ぎたる―ちよつとわかりかねる語であるが、「国文故実風俗語集釈」で江馬務氏は「丁字の染料を黒くなるまで注ぎかけて染めた単」といつておられる。

。音羽の山には―諸本に異同がひどい。主なるものをあげると次のごとくである。

一、をとほの山には―承応版本(流布本)

二、一首にみてり―鎌倉市図書館蔵本

一方三三天―連空本

一事三三天―九条家本

一定仏三天―蓮空本イ・九条家本イ

三、みどり也―内閣文庫本

めぐりくる―深川本

以上のごとく、どれをとってみてもそのよった原典がよくわからない。篠崎五三六氏は「引歌と狭衣物語」(国語国文、昭和九年十一月号)で、「古今六帖の歌でも、また全訳王朝文学叢書の頭註に引く「山科の音羽の山の音にだに人のしるべく我が恋ひめやも」といふ歌でもここには適当したものではない。何となれば、狭衣の口に上った詞は心地よげに茂った池の菖蒲を背景としてその厭世の心を表現したものと考へられるからであ

る」と述べておられる。日本古典全書（朝日新聞社刊）の補註では、右の説を紹介したあとで、「音羽の山にはといふ拍数から考へて今様か何かの歌謡の一句を口ずさんだのであろう」といつておられる。なお篠崎氏の文の中にも、「厭世の心を表現したもの」とあるように、この場面から考えると、お経の文句でも口ずさむにふさわしいところであるが、それに該当する句も見当たらない。

ありつる御返り、いづれもをかしき中に、宣耀殿のは御手も心異こころにをかしげにて、

うきにのみ沈むみくづとなり果てて

今日はあやめのねだになかれず

とある気色など、むかひ聞えたる心地してらうたげに、あはれ浅からねば、少し涙ぐまれ給ひぬ。

〔口訳〕

先に出された御手紙のご返事は、いづれも結構であるその中で、宣耀殿からのはご筆蹟も特別で趣深く、

どろにばかり沈むみくづの如く、つらい思いの中に沈みはてた私は、今日は五月五日のあやめの節句の日で、その根さえ流れないでいるように、声に出して泣くことさえできません。あなたは声に出して泣くとおっしゃるけれど。

と書いてある様子などは、直接問い申している心地がしてかあいらしく、しみじみとした気持も浅くないので、少し涙ぐまれなされた。

〔注記〕

。ありつる—先に出された宣耀殿や一条院の姫宮方へのお手紙のこと。

。うきにのみ沈むみくづとなり果てて今日はあやめのねだになかれず。

うき—懸詞。泥土うきと憂き。

み—懸詞。水屑のみと身。

ねだになかれず—懸詞。根だに流れずと音だに泣かれず。

みくづ—水中のごみのこと。

ねだになかれず—あなたは声に出して泣くこともできようが、

私は人目があるので声に出して泣くこともできないということである。宣耀殿は東宮妃。

この歌は、「百番歌合、廿二番」に「恋ひわたる袂はいつも乾かねど今日は菖蒲の根さへ泣かれてと侍りける御返し、一条院宣耀殿の女御」として出ている。たし第四句「今日のあやめ

の」。参考歌としては次の歌があげられる。

蘆根はふうきは上こそつねなけれ下はえならず思ふ心を（古

今六帖）

いかでかくねを借しむらむあやめ草うきには声も立てつべき

よを（詞花集・周防内侍）

。むかひ聞えたる心地して—宣耀殿は東宮妃なのでなかなか直接対座することはできない。そこで、このなつかしいご返歌をみて、せめて「むかひ聞えたる心地」がしたというのであろう。

（本学教授）

（四八・七・一〇）